

Title	しるしの意味するもの
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学論集. 12 p.147-p.164
Issue Date	1995-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79661
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

しるしの意味するもの

井 本 英 一

Signs and Marks

Eiichi IMOTO

ことばによる認識ではなく、ある種の標識によって、直感的にその意味を認識する場合がある。このような標識は、特定の集団による約束であるので、他の集団の間では通用しない。標識の意味は、ことばによって表現されるとき、必ずしも、各人が同じ文によって表現するとはかぎらない。

テーバイの王ライオスに、男子をもうけてはならない、その子は父殺しとなるであろうというアポロンの神託がくだった。しかし、ライオスは妻と交わり、男子をもうけた。そこで、ライオスは、生まれた赤ん坊の腫に針を刺し山に捨てた。赤ん坊は他の王家の王妃に拾われて養育された。赤ん坊の足は、針で刺されたために腫れあがったので、オイディプス（足の腫れた人）と呼ばれた。オイディプスは、王家の養子になったが、たまたま実父のライオスと遭遇し、父とは知らず父を殺し、スフィンクスの投げかける謎を解き、実の母と結婚し、母に二人の間の娘であり、自分にとっては妹であるアンティゴネとイスメネを生ませた。母との間には、さらに二人の男児もいた。オイディプスは、終生びっこを引いていたが、足の傷から、母は自分の子であることを知る。母は縊れて死に、オイディプスは自ら目をついて盲目になり、娘に手を引かれて消え去る。

これがオイディプス伝説の粗筋である。文芸化されたので、伝承には多少の違いがある（高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、1960年、77頁）。しかし、この伝説には、注目すべき特徴がある。王家の新生児（ことに長子）の腫を傷つけてびっこにし、その子が成長して実母といわゆる聖婚をするのがそれである。その前に実父はその子によって殺害される。この子は、最終的には盲目となり、この世から去る。この物語の背景には、古代の長子供儀の習慣を見ることができそうである。長子は神の取り分とされたので、供儀して神の許に送り返さねばならなかった。供儀される赤ん坊は、目印をつけられ、自然の中に戻して物忌みの状態に置いた。びっこや片目を盲にするのは、このための目印であった。このような文化的約束ごとが通じる社会では、足が腫れてびっこを引いたり、片目（あるいは両目）を失った人は、供儀されて、親神の許に帰る神の子と見なされた。神の子にとっては、自分の実母は、妻であり恋人であった。二人はイシュ

タル女神とその子であり夫であるマルドゥク、ヴィーナスとその愛人アドニスとの関係と同じ関係にあった。神の子イエスとその母マリアの間には、もう恋人や夫婦の関係はない。イエスは、きわめて宗教色の強い形で、神の許に送り帰されるとき、身体に聖痕をつくった。ことに、十字架上での苦痛を早く終わらせるために、刑吏の槍で脇腹につけられた聖痕は、後世まで信仰のしるしとして伝承された。手・足・心臓・額・肩あるいは脇から出血し、化膿することもなく治癒し、また新たに出血を繰り返す女性が歴史上伝えられている。これらの女性には、イエスの聖痕が顕現したわけで、そのうちの何人かは、聖女に列せられている。この場合は、神の許に送り返される神の子につけられたしるしが、女性信者に移ったのであった。

ヤマトタケルは、東国平定のあと信濃国から尾張国に入り、婚約していた尾張国造の祖ミヤズヒメと結婚した。ヤマトタケルは、身に帯びていた草薙剣をミヤズヒメの床のそばに置き、伊吹山の神を討ちに出かけた。山の神は、雹を降らせてヤマトタケルを苦しめた。山から降りて休息し、やっと正気を取り戻したが、当芸野に着くころ、足が疲れて歩けなくなった。ヤマトタケルは杖をついてゆっくりと進んだが、三重村に着いたときには、足が腫れて三重がさねの餅のようになってしまい、疲労その極に達した。能煩野に着いたとき、故郷の大和国を偲んで歌を詠み、病が改って亡くなった。金閼丈夫は『木馬と石牛』（法政大学出版局、1982年）所収の「やまとたける」の中で、ヤマトタケルとオイディプスが、同じ伝承にもとづいていることを始めて論じた。金閼は両者の伝承の十の共通点を挙げている。実母イオカステあるいは叔母ヤマトヒメとの聖婚、父による遺棄あるいは疎外、足の腫れ、実母あるいは山の神の殺害、妻の自害あるいは投身、落魄の中の放浪、墓所の移動などがそれである（26－29頁）。

ヤマトタケルは、死去する前に足を痛めて歩行困難に陥った。オイディプスは、誕生後間もなく、針を刺されてびっこになった。両者とも、跛行は神の許に行くしるしであったが、両者の伝承では、母であり妻であるイオカステと、妻のオトタチバナ姫が代わりに死んでいる。本人らは、盲目や病気にかかり、消えてゆく。この伝承を見ると、神の許に帰る者のしるしをつけられた者が死なないで、妻が代死する段階が新しく発生したと考えられる。『旧約聖書』の「創世記」のヤコブ伝には次のような伝説がある。ヤコブがヤボク川の渡しにいと、一人の人が現れて、明け方まで相撲をとった。その人が、ヤコブの腿のつがいに触ったところ、そのつがい外れてしまった。その人はヤコブに対して、あなたはヤコブ（腫をつかむ者）と呼ぶのは止めて、イスラエル（神と戦う者）と呼びなさい。あなたは、神と人々とに戦いを挑んで勝ったからだといった。ヤコブはこの場所を神の顔と名づけ、川を渡って去っていった。イスラエルの人は、今でも腿のつがいにある腰の筋肉は食べない（32.23－33）。ヤコブは腿の筋をはずされて、神に供養されるしるしをつけられ、びっこを引いていたが、自分が供養される神と戦って勝ったため、神に供養されずに済んだ。因みに、腿の筋肉は、ヤコブの身体のうち、神に供える部位の肉であったと考えられる。したがって、人間はその肉を口にするのはタブーであった。神に腿の筋肉を供える習慣が廃れると、その部位の肉を食べてはならないという戒律だけが残った。10～12世紀の北

宋の首都開封には、西方から流入したユダヤ教徒の街が形成された。ユダヤ教は、中国では挑筋教あるいは刀筋教と呼ばれたが、それは「筋肉を除去する宗教」の意であった。挑筋教徒も、筋肉を除去するだけで、それを神聖視することはなかったと思われる。ユダヤ教では、人間に代わって羊を供犠する習慣がアブラハムとその長子イサクの故事に見られるので、筋肉を除去するというのは、羊の筋肉のことである。一方、セム民族は、ユダヤ教徒もイスラム教徒も豚肉をタブーとして口にしない。ヘロドトスによると、古代エジプト人（セム民族ではなく、ハム民族であるが）は、豚を穢れた動物と見なし、道で豚に触れると、着衣のまま川に飛び込んで体を漬けた。豚飼いは、エジプト内のどの神殿にも入ることはできず、婚姻も同業者の間で行った。しかし、年に一度あるいは二度、豚を供犠して、その肉を食べた（『歴史』2・47）。しかし、この習俗が廃たると、豚肉を食べる機会はなくなった。

高句麗の開祖朱蒙の第一皇子が、第二代目の瑠璃明王である。19年（前1年）、いけにえの豚が逃げ出したので、二人の家臣に豚を追わせた。二人は沢中で豚を捕え、脚の筋を切ってしまった。王は、いけにえになぜ傷をつけたのかと怒り、二人を坑の中に投げて殺した。九月、王が病気になったとき、巫があゝの二人の祟りだといったので、王は謝らせた。すると病気は癒えた（金富軾『三国史記』「高句麗本紀」、金思煒訳、六興出版、1980年）。豚の脚筋を切ったのは、豚がこれ以上逃げないためと考えられるが、そうではなくて、ユダヤ教と同じように、いけにえのしるしとしての筋の切断であったと思う。ユダヤ教では一方、身体に欠損のある者が神に近づいたり、四肢その他に欠損のある牛や羊を供犠することは禁じられていた（「レビ記」21. 16-21、22. 23-24など）。この伝承にのっとれば、ヤコブは跛行していたので神に近づけなかったが、供犠のしるしをつける伝承は、これとは別のものであったらしい。高句麗では、二つの伝承が共存していた。高句麗では、風土的理由と思われるが、羊ではなく豚が供犠された。

『西遊記』（村上知行訳、社会思想社、1976年）には、玄奘の出生譚がある。玄奘が生まれたとき、母満堂嬌には、赤ん坊を捨て子にしなければならない事情があった。母は赤ん坊の足の小指を咬み切って、後日のしるしとした。川に流された赤ん坊は、金山寺の長老に拾われて養育された。玄奘は18歳になったとき、捨て子にされたときに添えてあった血書をもって母を訪ねた。のちに、母は、目の前で玄奘に新しい靴をはきかえさせたとき、咬み切られた小指を見て、わが子を抱いて泣いた。捨て子をするとき、足の一部を傷つけるのは、異界つまり神の許に長子を送るしるしであったと思う。やがて本来の意味は忘却せられ、ただの目印とされるようになった。ローマ建国の祖ロムルスは、レムスと双子として生まれたが、槽に入れられて川に流される。のちになって、自分たちの素姓が分かったとき、この槽が双子のしるしとなった。槽の胴を締める青銅の帯には、よく分からない文字が刻み込まれていたが、これも目印になった（『プルターク英雄伝』（一）「ロームルス」7、河野与一訳、岩波文庫、1952年）。『西遊記』の玄奘の場合、板に乗せられ、血書を添えて流された。アテナイ王アイゲウスには子がなかったので、デルフォイの神託をうかがった。帰途、トロイゼンに立ち寄り、そこの王女と同衾したところ、王女は孕

んだ。アイゲウスは、洞穴の中に剣と靴を隠し、岩で蓋をした。そして王女に、息子が生まれて成長したら、人に知られずにこの岩を持ち上げて、剣と靴をとり出し、アテナイに持ってこさせるようにといい残して去った。これが英雄テセウスであった（前掲書「テーセウス」3）。『西遊記』の玄奘の母は、夫が殺されたとき、身重になっていた。生んだ赤ん坊を川に流したが、赤ん坊は寺に拾われて養育されて僧になった。母は百足の靴を寺に寄進し、自分の目の前で、僧たちに靴をはきかえさせ、小指が咬み切られたわが子を見つけた。僧の話であるので、剣のモチーフは見られないが、靴は古くは息子を認知する大切な目印であつたらしい。

オデュッセウスは乞食の姿をして宮殿に帰ってくる。昔の乳母エウリュクレイアは、饗礼としての客人の足洗いをしたとき、昔、オデュッセウスが猪狩りのさいに受けた傷痕を認める。オデュッセウスは彼女に他言しないように命じる。妻のペネロペイアは、かつてオデュッセウスが引いた強弓をもち出し、求婚者たちに試みさせるが、誰もこの弓が引けない。オデュッセウスは、弓をひきしぼって求婚者らを射殺する。ペネロペイアは、夫であることを認め、放浪の話を聞く。求婚者らの魂は、ヘルメスに導かれて冥府にくんだり、アガメムノンとアキレウスに自分らの運命を語る（ホメロス『オデュッセイア』高津春繁訳、筑摩書房、1966年、第17巻—第24巻）。オデュッセウスは乞食の姿をして帰還する。乞食の姿とは、神が身をやつした姿に他ならない。オデュッセウスの足に傷があるのは、傷が供犠される者のしるしでもあり、神のしるしでもあったことを示している。オデュッセウスは猪狩りのさいに傷を負ったが、ヤマトタケルが伊吹山の神の化身である白い猪をあなどって、びっこになったことや、ヤコブがヤボク川で神人と争ってびっこになったことと照らし合わせると、猪は神の化身であったと考えられる。玄奘伝説の場合は、文芸化が進んでいるため、このような痕跡は見られない。この種の話は供犠から出ているので、どの伝承も、多くの殺害の話を伴っている。

目印は足に施す他に、顔に施した。漢字の臣という字の起源は、神に犠牲にされる者が顔につけられた大きな目の形であった。自らを供犠するために、眼晴を傷つけている形は「賢」のつくりの部分に見られる。臣も、神にささげられた一つ目の者であった（白川静『中国古代の文化』講談社、1979年、240—241頁）。日本民俗学が、神に供犠されることが決まった者に、片目、片足（びっこ）のしるしをつけるというのが、中国にもあったことになる。イスラエルの預言者は、顔にしるしがあった。預言者の一人が、主のことばに従ってその仲間に、自分を打つようにいった。仲間は拒んだ。預言者は、主のことばに従わない者は、獅子に食われるだろうといった。その者が、彼のそばを離れて去ると、すぐ獅子が彼を殺した。預言者は、別の人に、自分を打つように求めた。その人は預言者を打ったので、目を傷つけ、ほうたいを当てて姿を変え、道で王を待っていた。王が通ったとき、預言者は、目のほうたいをとり除いたので、王はそれが預言者であることを知った。預言者は、王に主のことばを伝えたので、王は悲しみ、サマリアに帰った（「列王紀」上、20.35—43）。預言者は、人為的に片目をつぶし、人の前に突然現れた。片目であることは、神のことばを預かり、人間に伝える職能人のしるしであった。

14世紀の東洋周遊旅行案内書であるJ・マンデヴィルの『東方旅行記』（平凡社、1964年）には、当時の欧州人の東洋に関する荒唐無稽な話が満載されている。資料価値があるかどうか、はばかれるが、次のような話が見られる。ソモベル（スマトラ）島には高貴な王が住んでいる。この国の人々は、焼けた鉄で顔にしるしをつけるが、それは貴人の証拠で、ほかの者から区別するためである。というのも、彼らは世界中で、自分たちがいちばん偉いと思っているからである（152頁）。14世紀までの伝承に、貴人が顔に焼きごてを入れるという伝承があったというのが、文身であったのかも知れない。イスラム教の開祖マホメットにも神の使徒としてのしるしがあった。マホメットが幼少のとき里子に出されたが、乳兄弟といっしょにテントの裏で羊の番をしていた。そのとき、白い衣服を着た二人の男が、雪を盛った鉢を手にしてやって、マホメットの腹を割いて心臓をとり出し、中から黒いものを出して捨て、心臓と腹を雪で洗い清めた。二人は、幼児マホメットの背中の両肩の間に、預言者のしるしを押して去った。のちに、シリアの国のキリスト教修道士バヒーラーが、伯父アブー・ターリブの隊商といっしょに駱駝のかごの中に入れてやってきた幼児マホメットの背中を調べたところ、両肩の間に預言者のしるしを見た（イブン・ヒシャーム著・嶋田襄平訳「マホメット伝」『世界文学大系68アラビア・ペルシア集』筑摩書房、1964年、9-12頁）。ユダヤ教の預言者のしるしは目をつぶしたが、マホメットの預言者としてのしるしは目ではなく、吸いふくべのような形をした、両肩の間のこぶであった（前掲書、13頁、注（1））。このしるしは、ユダヤ教徒に見つかる危険なので、彼らから隠さなければならないとある。ユダヤ教徒にとっては、マホメットはユダヤ教の預言者となるのではなく、全く新しい宗教の開祖、預言者になるからである。

イランでは神話時代のカイ王朝の代々の王の腕には、黒いあざがあった。このあざは母斑という先天性のものであった。英雄グーダルズは、ある夜、夢を見る。トゥーラーン（トルキスタン地方）の地に、カイ・クバード王の後裔で、母はトゥーラーンの女性である、カイ・フスローという貴人がいる。この貴人がイランに戻ってきて王とならないかぎり、イランは暴虐の王の桎梏から逃れ出ることはできない、という内容であった。グーダルズは、息子のギーヴに一部終始を話し、トゥーラーンの地にカイ・フスローを探しに行かせる。ギーヴは7年あと、貴人カイ・フスローを見つける。事情を話して、カイ王家のしるしを示してもらう。カイ・フスローは、腕を露わにすると、そこには、カイ王家のしるしである黒いあざが、くっきりと現れた。ギーヴは、カイ・フスローを奉じてイランに帰還した（フェルドウシー『シャー・ナーメ（王書）』黒柳恒男訳『王書』平凡社、1969年、296-302頁）。マホメットは、聖なる心臓（聖心）に黒いしるし、あざをもっていたが、イスラムの伝承ではその意味が忘却され、洗い落としている。聖心のしるしの意味が失われた時代であったので、黒いしるしを洗い落としても、マホメットの聖性が失われることはなかった。預言者のしるしは、新たに、両肩の間のこぶとして、人目につかない所にできた。イエスは、ガリラヤの海辺に行き、そこから山に登った。すると、群衆が足なえ、盲人、聾啞者、その他の身障者を連れてきたので、イエスは彼らを癒してやった。群衆は3日間、何も

食べていなかった。イエスは、七つのパンと数匹の小魚で、4,000人の男女を満腹させ、パンくずが七つの簞にいっぱいになった。パリサイ人とサドカイ人がイエスに近づいてきて、イエスに天からのしるしを示せと迫った（「マタイ伝」15.29-38、16.1-3）。

アダムとエバの間には、カインとアベルの二人の男の子が生まれた。カインは農夫になり、アベルは羊飼いになった。主は、アベルの供物をよみし、カインの供物は気に入らなかった。カインは弟のアベルを野原に呼び出して殺した。大地はアベルの血で染まったため、カインに対して何の恵みも示さなくなった。カインは追放され、地上を放浪しなければならなくなった。主ヤハウェは、カインを見つけた者が、彼を打ち殺さないように、あるしるしをカイン（の顔）につけた（「創世記」4.1-16）。J. G. フレイザーは、『旧約聖書のフォークロア』（太陽社、1976年）の中で、カインのしるしについて論じている（45-59頁）。ロバートソン・スミスは、カインがつけられたしるしは、彼が所属する部族のしるしで、もし彼が害されたら、部族の者らが復讐してくれるので、それは彼を保護するしるしであったとする。フレイザーは、カインのしるしは、殺人者を変装させる方法で、殺人者を見て、恐怖心を起こさせるように変容させて、死霊が判別できないようにするためのものであったと主張する（45頁、58頁）。殺人者とは限らないが、エジプトの逃亡奴隷で、ナイル川河口にあるヘラクレス社に逃げ込み、神聖なしるしをつけてもらって神に一身を捧げれば、もはや何人といえども、その者の身に手を触れることは許されなかった（ヘロドトス『歴史』2.113）。アジュールに逃れた者が、身につけられたしるしは、カインが主によってつけられたしるしと同一のもので、きわめて神聖かつ穢れていたもので、畏怖されたのであろう。それは神の庇護とされた。

フレイザー説は邪視除けで、戦士が身につける甲冑や楯につけられたしるし、つまり文様や紋章と同じものと考えている。カインのしるしは、具体的にどんなものであったのか、本文では知ることができない。殺人者を供犠して、神の許に送り返すため、片目にしておいたのかも知れない。あるいは、片目のしるしとして、額に目の型の焼き傷をつけたのかも知れない。インド神話では、インドラはかつてガウタマ仙の妃アハリヤーを姦した罪で、身体に千の女陰のしるしをつけられたが、供養の功德により千の目に変えた。この話は、多くの漢訳仏典の中にとり入れられているので、人口に膾炙した説話である。千手観音の手のひらには、目が彫られているので、千の手と共に千の目をもっていることになる。千の目は、洞察力が優れているしるしである。

1627年2月8日、長崎近郊の村落で、ローマ派耶蘇教徒男女12人が捕縛され、灼けた鉄を額に当てられ、棄教を迫られた。肯んじなかったため、さらに両頬に1個ずつ烙印を加えられた。その他、あらゆる迫害を受けたが、棄教することはなかった（フランソア・カロソ著・幸田成友訳著『日本大王国志』平凡社、1967年、199-200頁）。焼きごてを当てられてできた傷痕は、神仏の加護ある者のしるしであったが、やがて消えてゆく。パウロは、キリストに対する忠誠ゆえに受けた焼き傷を身につけていた（「ガラテア書」6.17）。前記耶蘇教徒の額や頬のしるしは、本人たちの殉死と共に地上から消えるが、説話では、神仏が代受苦してくれる。安寿とつし王丸

の姉弟は、人買いの山岡太夫によって母と乳母から切り離され、丹後のさんせう太夫に売りとばされる。二人は逃亡の相談をするが、太夫の三男三郎に立ち聞きされ、額に焼きごてを当てられる。しかし、安寿が膚の守りにもっていた地藏菩薩をとり出して見たところ、自分たち姉弟の顔や頬には何の傷痕もなくなっているのに、地藏菩薩の白毫の所を見ると、姉弟の焼きごてを受け、地藏菩薩が身代わりになっているのが分かった（室木弥太郎校注『説教集』新潮社、1977年「さんせう太夫」107、112頁）。罰としてのしるしと、奇蹟としてのしるしは、民衆の間では同じものと見なされていたらしい。しるしをつけて普通人と区別し、普通人の罪障を負わせて神仏の許に送ろうとしたのである。地藏菩薩がさらに霊験を示し、救われた本人は聖者と見なされる。本人は土車によって四天王寺に参詣し、最終的には都の貴族に養子として迎え入れられる。白川、前掲書によれば、刑罰は報復刑を科するよりも、むしろ贖罪的な方法が行われることが多かった。罪という字は、もとは自の下に辛いを書いた。自（鼻）に入れ墨（辛）を加えてこれを神に仕える者としたのが字の起源であった（241頁）。スマトラ島の貴人が、顔に焼きごての傷痕を入れていたことは前述した。これが入れ墨であるのか、実際の火傷の痕であるのかは不明であるが、神に近づくことのできる人物と見なされたのであろう。宮殿の入口を守る門番には、宦官や刑余者を当てたが、彼らは今日では想像しがたい程の権威をもっていた。つまり、彼らは、人間と神との中間にあり、神に近づける人間とされたからである。因みに、宦の字は、一つまり廟屋と臣つまり目にしるしをつけた神の徒隸として仕える者から成る（白川静『字統』平凡社、1984年、120-121頁）。宦官は去勢された者であったので、身体的には、いくつかの女性化したしるしをもっていた。その一つは、頭髮の保持であった。男性の頭髮は、ギリシア・ローマ人では、欧州人と同じように、残された絵画、彫刻で見ると、脱落する割合は大きい。J. G. フレイザー『王権の呪術的起源』（折島正司・黒瀬恭子訳、思索社、1986年）にいう。ユリウス氏きっての名家カエサル家は、その名を彼らの長い髪（カエサリエス）からとった。その昔、長い髪は王族のしるしであったと思われる。幾世代も後のフランク族にとってもそうだったように（209-210頁）。ユリウス氏が小ユピテルを、アルバ・ロンガの古式に則って崇めたことが、ユリウスの奉納した祭壇の記銘から知ることができる（209頁）。古くは、カエサル家の者は、長い頭髮を保持するための工夫をしたと考えられる。恐らく、巫女として祭祀を行ってきた家が、男系化したのが、頭髮は長いままにしておく処置がとられたのであろう。あるいは、男系の祭司が自ら去勢することによって女性化し、頭髮を永年にわたって保持したとも考えられる。歴史時代にはこのような祭祀は跡を絶ち、ただ家名としてのみ残ったのであろう。

長髪を肩と背に垂らし、神と近づくことのできるしるしを覆い隠したのであろう。カエサル家の者にも、何かしるしがあったにちがいないが、伝わっていないので何ともいえない。マホメットは古代のシャマンであったので、頭髮は伸び放題にしていた。マホメットが幼児のときから、両肩の間にもっていた突起物のしるしは、異教徒、ことにユダヤ教徒から見つけられないように、隠されていた。このしるしは、衣服や毛髪で覆われていたと考えられる。肩を露出することは、

相手に身を委せることを意味した。ローマ軍が優勢な敵と戦っていたとき、カエサルが敵の部隊を分散する目的で、右側の坂道から派遣したハエドゥイ族が現れた。彼らの武装が敵のものと類似しているため、ローマ軍を大いに怖れしめた。彼らが降服のしるしとして右肩を露出しているにもかかわらず、自分らを欺くためだと考えた（カエサル著・近山金次訳『ガリア戦記』岩波書店、1942年、371-372頁、国原吉之助訳、講談社、1994年、281頁では、右肩を露出するところを援軍の目印として、と訳している）。前漢の周勃が呂氏の乱を平定しようとしたとき、呂氏につく者は右肩を脱ぎ、朝廷につく者は左肩を脱げといったところ、皆、左肩を脱いだ（『史記』「呂后本紀」）。右袒するか左袒するかは、左右に意味があるのではなく、肩を露わすことに意味があった。左右は、さし当っての敵と味方の記号であった。『ガリア戦記』の場合も『史記』の場合も、肩を出すことは、そこに所属するしるしを受ける行為である。肩を露出して従属しようとしたのであろう。子牛に焼きごてを押して所有印としたり、羊の毛にヘナで文様をつけて所有印とするのと同じ考え方である。『新約』の「ヨハネ黙示録」はいう。獣を拝する者は、子供も大人も、富者も貧者も、自由人も奴隷も、全ての人々は、その右の手あるいは額に刻印を受け、この刻印のない者は、物を買うことも売ることもできなかった（13.16-18）。この場合の刻印は、反キリストのしるしである。聖者のしるしとは全く反するしるしであるが、ある集団に従属するしるしであった。エジプトのヘラクレス社に逃げ込んだ奴隷がつけられたしるしは、神の集団に従属するしるしであったことになる。

沢田五倍子（四郎）は、夏の夜の夕涼みに、老人から次のような話を聞いた。ある人が死んだとき、その人の掌に、南無阿弥陀仏と書いて葬ったら、のちに、掌に南無阿弥陀仏と書かれてある子供が生まれてきたという話をよく聞いたが、奈良県吉野郡地方でも、死人に字を書いておくと、字が書かれた子供が生まれてくる。そして、この字は、前生の家の土でなければ消えない（『無花果』坂本書店、1926年、122-123頁）。フレイザーも同じようなことをいっている。誰かが死んだとき、煤か油で死体にしるしをつける。つぎにその家に生まれた子に同じようなしるしがついていると、死者が生まれかわったといって歓迎される（『アドニス・アッティス・オシリス』ロンドン、1914年、95頁）。西オーストラリアの先住民のインフォーマントが、人類学者 A. R. ブラウンに、自分の脇腹にある小さいしみを指して、次のような話をした。彼の父は、フクロネズミの脇腹を槍で刺して殺し、母が食べたので、彼を生んだとき、脇腹に槍の傷痕であるあざがあった（フレイザー、前掲書、104頁）。三島由紀夫の『豊饒の海』四部作のそれぞれの主人公は、20歳にして命をおとす。この4人は、輪廻転生を証するかののように、それぞれが脇腹のあたりに唐鋤星からすきぼしのような、小さな三つの黒子はくろをつけていた。四人が共通して持つしるしは、本多繁邦が長い期間にわたり、目撃して実証することになる（山折哲雄『神秘体験』講談社、1989年、207-211頁）。脇にしるしのあるのは、ある種の聖性の表われであつたらしい。高句麗の王族には、代々、左脇に金色の竜の鱗の形があった。王家が、竜女の血を引いているからである。王家と竜蛇の結び付きは、インド、ビルマ、安南、カンボジアなど、東南アジアの諸族に広く見

出されるもので、多くは竜女と王朝の始祖の王子との神婚を物語っている（依田千百子「朝鮮の王朝起源伝説と動物」『昔話伝説研究』16号、1991年、67頁）。天孫山幸彦は、海神宮を訪ね、そこの豊玉姫とねんごろになる。豊玉姫は、さきに地上に帰った山幸彦を追って海辺にたどりついたとき産気づき、いまだ産屋を十分に葺かないうちに出産した。豊玉姫は、夫の山幸彦に、海神宮の者は出産するとき、もとの姿になって出産するので、覗き見しないで欲しいとたのんだ。好奇心にかられた山幸彦が覗き見をすると、姫は、ワニあるいは竜の姿になって、のたうちまわっていた。生まれた赤ん坊はウガヤフキアヘズノミコトといった。姫は、夫が約束を破ったので、海神宮へ帰り、代わりに妹の玉依姫を地上に遣わして赤ん坊を養育させた。赤ん坊は成長し、叔母玉依姫と結婚し、神武天皇をもうけた。天皇の玉体に神聖なしるしがあるということは、タブーとして論ずるべきことではないが、日本では、緒方三郎がいる。豊後の山里に住む女のもとに、夜な夜な男が通ってくる。正体を知るために、男の狩衣のくびがみに針を刺して跡をたどると、岩屋の中にいる大蛇の姿をした明神であった。生まれた子の背中に、鱗のある蛇の尾形がついていたので、尾形氏を名乗った。そのほか、南北朝時代の勤王家五十嵐小文治の家系の者の脇の下には、三枚の鱗が生えたといわれている。緒方三郎の場合と同じように、大和三輪山式の神婚伝説にもとづいている。二つの場合とも、豊玉姫伝説とはちがって、子を生むのは人間の女で、蛇は人の姿をした男神である。三島由紀夫の『豊饒の海』では、主人公らは、脇腹のあたりに、三つの小さな黒子をつけていたとあるが、三島が五十嵐小文治の伝承を知っていたのか、偶然の一致であるのかは不明である（『日本昔話辞典』弘文堂、1977年の「緒方家伝」「五十嵐小文治」の項を参照）。

ギリシアでは、最高神ゼウスの家系に、しるしが伝承された。ゼウスは身を雄牛に変えて、カドモスの妹エウロペをさらっていった。父王アゲノルは、カドモスとその兄弟キリクスとポイニクスに命じて、エウロペを探し出すまで帰国を禁じた。カドモスがデルポイの神託を求めたところ、雄牛を道案内とし、その牛が倒れた所に都市を建設せよとのことであった。カドモスは、ポキスで脇に月形のしるしのある雄牛を見つけ、そのあとに従うと、牛はのちにテバイ市になった場所で横になった。カドモスは、この地にテバイの都市を建設した。ゼウスに誘拐されたエウロペは、クレタ島に渡り、ミノスとラダマンテウスを生んだ。カドモス伝承に出てくる雄牛は、エウロペであろう。脇にある月形のしるしは、ゼウスが本来もっていたしるしが、牛に姿を変えさせられた彼女にも移ったのであろう。

仏教国の王家の伝承では、仏陀の足跡の中でもっとも重要とされる輪相が、王の足裏や掌に見られるとされる。シャム王は、「仏足どおりの足裏ある者」といった通称で呼ばれる。カンボジア人は、ヴィシュヌの裔と自称する彼らの王を「神足ある偉大な王」と呼び、生得の王のしるしとして、子供のときから、両手足に輪相があると考えている。このような考え方は、輪相に俗界の征服者（転輪王）の特別のしるしを認めた、インドのバラモン教徒の古俗の遺風にすぎない（『南方熊楠選集』6「神跡考」、平凡社、1985年、285頁）。輪相は、人の掌にある南無阿弥

陀仏の名号と元にさかのぼれば、同じ聖性にたどりつく。必ずしも、俗界の王である転輪王にあやかるわけではない。転輪王じたい、単に俗界の征服者であるばかりか、法輪を転がす聖王とされた。掌にある輪相は、掌の中の女陰相やそれが転じた目のしるしと同じもので、聖なる目じるしであると同時に、所属を示すしるしであったと思われる。

イスラエル人は、子供のうちのういごは、全てあがなった。このことを忘れずに、手につけてしるしとし、目の間に置いて覚えとしなければならなかった（「出エジプト記」13・15）。これは、彼らが主に従属するという契約を、箱の中に入れて、上膊と額につけたことをいっている。これは身体につけるしるしではなかった。イスラエル人が、主との契約として身につけるしるしに割礼があった。主はアブラハムに次のようにいった。汝らと汝らの子孫は、生まれて八日目に割礼を受けて、私との契約を守らなければならない。汝らの子孫でない奴隷も同じように割礼を受けなければならない。割礼を受けない男子は、私との契約を破るゆえ、その人は民のうちから断たれるであろう（「創世記」17.9-14）。イスラエル人の割礼は、鉄器ではなく、石器で行うので、その古さがしのばれる。血のつながりのない奴隷も同じ割礼を受けたが、彼らはその集団に従属させられたことになり、もし逃亡すれば、主との契約を破ることになり、身を断たれる羽目に陥ることになったであろう。別所梅之助によると、割礼は成年式であったのが、いつしか幼い子に行うようになった。割礼は、キリスト教徒の嬰兒に施す洗礼と同じものであるという（『聖書民俗考』復刻版、有明書房、1975〈1943〉、100頁）。イスラム教徒も割礼を受けなければならない。イラン東北部のゴルガン郊外の村では、6-7歳の少年に施されていた。年齢の多様性については、アルノルド・ヴァン・ジェネップ著・秋山さと子、彌永信美訳『通過儀礼』思索社、1977年、75頁に諸例が見られる。

入れ墨は、身体に施すしるしであった。芸術となるのは、のちの発達形態であった。入れ墨は、未開段階では、トーテム集団に入るしるしであった（ジェネップ、前掲書、第6章）。入れ墨の図案は、本来のトーテムの形が図案化したり、くずれたりしたものが最初にあったと考えられる。関敬吾はいう。トーテム民族は特定の紋章をもち、その成員および財産にはこの紋章がつけられる。紋章は、外面的にはトーテムの一部もしくは全体を象徴化したものである（『関敬吾著作集』4、同朋舎、1980年、80頁）。衣服や家具・調度品に紋章をつける習慣が現在までつづいているが、トーテム民族に従属した習慣の名残であろう。朝鮮文化には、日本の家紋や家号に相当するものはないが、日本には、村の家々で所有を示すために、傘・下駄・提燈などにつける家印という符号があった。この符号は、八・冂・△・○などに文字を添えたものであるが、図形のみで文字のないものもある。図形のみのもは、木印と共通するものもある。木印は、山で伐った木を流し出すとき、元の主のわかるようにつけておくしるしで、家ごとのものを家印、村ごとのものを村印という。これらが発達して、刻印、焼印となり、さらに花押にもなった（柳田国男監修『民俗学辞典』東京堂、1951年、「家印」「木印」）。ことに、木印の項目下には、岐阜県大野郡有巢村で用いられた49種の木印の表とその名称が掲げてある（135頁）。近年、北九州や山口

県西部を中心に、ペトログリフ（岩刻文字）が多数発見されている。ペトログリフの中には、木印と似たしるしもあるが、単体であられる場合はまだしも、数十個が同一岩面に見られる場合は、しるしの集合といったものではなく、ある種の意図を伝達するための文の前身と考えなくてはならない。岩刻されたこれらのしるしが、象形文字なのか、一部が音節文字に、あるいは音標文字に発達したものなのか、全く不明である。しかし、これらのしるしのいくつかは、もとは、個人や部族をあらわすしるしであったことはいえそうである。また、山口県をはじめ、多くの地域で、岩石にうがたれた盃状穴（カップ・マークとかリング・マークとか呼ばれるもの）が見られるが、これも一種の標識であり紋章であった。何らかの所有標識であったので、当時の人にとっては自明のしるしであった（J.ヘイスチングズ『宗教・倫理百科事典』第4巻、エジンバラ、1911年、366頁。国分直一監修『盃状穴考』慶友社、1990年に多くの例あり）。

いわゆる原始的装飾と呼ばれるものの比較的小部分だけが、個人の所有標識に役立っているといえる。しかし、種族や家族の所有標識は、オーストラリア人の装飾においては、それよりはるかに数多い。オーストラリアの各種族が、その工具や武器の装飾にある特殊な図形を用い、その物がどの地方に属したかを知り得るようにしたことは、すでに論じられている。彼らは、自分たちの楯の上に、その種族のコボングを描く。オーストラリア人のコボングは、アメリカ・インディアンのとてむに相当する。それは、カンガル、鷹、トカゲ、魚などで、彼ら一族が出自した祖先であり守護神であった。オーストラリアの戦士が、彼のコボングに対する関係は、ヨーロッパの騎士が彼の紋章の動物に対すると全く同じ関係にある。かくて、ヨーロッパの戦士は、その楯の上に熊または鷲などを描き、オーストラリア人はカンガルの図形もしくは蛇の斑文の図形を以て彼の楯を飾るのである（グローセ著・安藤弘訳『芸術の始源』岩波書店、1936年、197-199頁）。日本の考古学的出土品である隼人の楯の文様に、連続三角文と逆S字の文様がある。三角文の意味については、種々の意見があるが、そのうち有力な解釈の一つに蛇の鱗説がある。楯の中央に描かれた逆S字文は、蛇そのものを表したのであろう。楯の上辺の連続三角文の上には、馬の毛がつけられていた。隼人は、蛇や馬をトーテムとする種族であったが、トーテムの観念はすでに失い、ただの伝承文様と見ていたようである。隼人は、同時代人にとって、その楯の文様がしるしであった。

ヨーロッパの墓碑には、犬の像をともなった例は多い。他の禽獣の例も多く、犬は忠誠、獅子は勇猛のしるしとされる。その人の家紋そのままの禽獣をそえたのも多い。日本でも、南部家の鶴など、その家に奇瑞のあった禽獣を紋としたものも少なくないが、諏訪氏の獅子のように、かつてわが国に実在しなかったものを用いたものもある。紋章の多くはトーテム信念にもとづいている（『南方熊楠全集』1、平凡社、1971年、502頁）。諏訪神社の社紋は獅子ではなく、五本の太い根から中央に三枝をもった主幹が伸び、左右にそれぞれ一本ずつ側幹が出て、各幹は二枝をそえた木で、主幹と二本の側幹の先端には、針葉がついている。この紋は、七枝文様や、ユダヤ教の燭台メノラを想起させる。諏訪神社は、神饌として鹿の頭を供える。現在は剝製を用

いるが、古くは75の生きた鹿の頭を神前に供えた。上社前宮の御頭祭^{おんとうさい}で、大祝の使者が諏訪、上伊那郡の豊作を祈ってまわる（谷川健一編『日本の神々』9、白水社、1987年、155-156頁）。諏訪神社の行事には、神道古来の儀礼が見られるが、一方で、西方の影響が見え隠れする。鹿は神自体であった。75頭の鹿のうち1頭が主神にあたるとされたのであろう。毎年、神である鹿は、殺されることによって再生した。神の再生は、農作物の豊饒と連動していた。

古代エジプトでは、近接する町や村が集合し、一つの行政的區域つまり州ができあがった。州はギリシア人によってノモスと呼ばれ、いくつかの州がエジプト全土を形成していた。ノモスは、多くの市町村の集合体であったので、とうぜんのことながら、多くの神々を擁した。やがて、ノモスには主神が出現するようになった。近代の都市が紋章をもっているように、それぞれのノモスは主神をかたどったしるしをもっていた。古代エジプトの神々は、周知のように、さまざまな動物や鳥であった。これらのしるしは、長い竿の上に台を打ちつけ、その上に載せた鳥獣で表わされた。この竿は、一種の旗で、英語ではスタンダードと呼ぶ。このスタンダードは、行列のときは、一行の先頭を行った。本来は、それぞれのノモスの主神が、ノモスの住民の先頭に立って、彼らを導いたのであるが、早い時期に、それは忘れ去られていたかも知れない。スタンダードがより象徴化すると、竿の先端から、当該の鳥獣の羽根や毛皮を垂らした。しかし、ヴェロニカ・イオンズはいう。アヌビスは、ジャッカル^{ジャッカル}の頭を持つ人間として、あるいはイシスに付き添う犬として、あるいは台座または墓に横たわっているジャッカルまたは犬として表現された。彼のシンボルは、柱からぶら下がり、血のとび散った白と黒の牛皮であった。その意味は確かでない（酒井傳六訳『エジプト神話』青土社、1988年、156頁）。アヌビスに供犠された白黒の斑のある仔牛が、その皮を剥がれ、血をしたたらせた皮が、竿の先から垂らされた。牛はアヌビスとは別種のものであるが、アヌビスを再生させるために殺された。しかも、アヌビスのしるしは牛皮であった。より古くは、アヌビスと牛とは別々の神格であったのが、習合した結果、このようなしるしになったと考えられる。

エジプトと同じ観念が古代中国にもあった。漢字「遊」は古くはしんにゅうがなかった。もともと「旂」は旅と同じく、旗を持って出行することを示す字である。族の字によって知られるように、その旗は氏族の標識であり、氏族神の宿るところである。氏族の人々は、出行するとき、その氏族神を奉じて行動した。守護神と共にあることによって、あらゆる災厄から身を守ることができたからである。旗は神桿としての機能を持っていた。神桿の上部に、吹き流しとしてそえられているものは、わが国の「ひれ」に近いものであるが、神の宿ところは、この吹き流しの部分にあったようである（白川静『中国古代の文化』講談社、1979年、199-200頁。白川静『文字遣遥』平凡社、1987年、8-11頁）。エジプトでは、吹き流しの部分がトーテム獣の皮であった。中国でもエジプトでも、氏族神は竿を依り代として依り着き、守護神として氏族を先導した。

土器にしるしをつけることは、世界中いたるところで見られる。これらのしるしは、個々の陶工や工房のサインであることが明らかである。近東に関しては、D. ポッツの「テペ・ヤヒヤー

の陶工のしるし』『パレオリエント』7号、1981年がある。中国の場合、殷代およびそれ以後の時代の土器に刻まれたしるしが、いかなる目的のためのものであったかを確かめることで、先史時代の記号を研究することができる。これらのしるしは、同じような機能を果たしていた。つまり、殷代および先史時代の土器のしるしのほとんどが、家族・宗教・氏族の標識や族章であった（張光直著・伊藤清司、森雅子、市瀬智紀訳『古代中国社会』東方書店、1994年、137頁）。殷代の青銅器には銘を持つものが少なくない。銘があるとしても、父乙、祖辛のように、父祖の廟号のみをしるすもの、氏族名をつけ、あるいは図象を付しているものが多い。父祖の廟号をしるすものは、その祖祭のための器と見られるが、氏族名や図象を付するのは、器の所有者の表示であるとしても、それは他の氏族や図象を意識し、それと区別するためのものである（白川静『中国古代の文化』287頁）。先史時代の土器は、美術品としてつくったものではない。日常の食器として大量生産されたものでもなさそうである。日常の食事は、手づかみで、食物は木の葉の上や石の上に載せれば十分であった。容器は、その名残りは現在でも見られるが、魂の入れ物であった。容器に刻まれたのは、製作者の所有のしるしばかりではなく、氏族の個々の成員や氏族そのもののしるしであった。しるしは、より古い時代のトーテムでもあった。文様化した奇怪な動物像は、魔除けになったであろう。それはトーテムであり、守護神であった。破壊されることのない金属器には、精巧な文様が施された。墓に副葬される土器にも、さまざまなしるしが施されている。死者を再生させるための何らかの魂をもった容器に食物を盛り、祖先と一体化させたのであろう。ヤコブは、最期に床の上でその脚を揃え、息絶えてその同族に加えられた（「創世記」49.32）。イスラエル人は、ヤコブの場合に見られたように、死ねばみな、同族に加えられた。表現方法こそちがえ、多くの他の民族の間でも、同じ考え方が見られる。土器にしるされたしるしは、墓穴内における同族との共同飲食に必要なものであった。いくつかの土器は、現在もその名残りがあがるが、埋葬直前に破壊されたと考えられる。あるいは、全体破壊ではなくとも、植木鉢の底の穴のような穴を、土器の下部を欠いて、人為的につくった。この種の出土品も多数あるので、土器に内在する魂が解放されて、死者を賦活したこともあったと考えられる。

神武天皇の夢に天神が現れて、天香山の社の中の土をとって、平瓦80枚をつくり、同じくお神酒を入れる瓶をつくり、天神地祇を祭れよといった。そこで椎根津彦にぼろぼろの衣服と蓑笠をつけさせ、老人のかたちにつくり、弟おとかし猶に箕を着せて、老婆のかたちにつくって、香山の土をとってこさせた（「神武天皇即位前紀」）。蓑笠は、神の使者や死者が身につけるものであった。送葬の車には、蓑笠を載せた（白川静『字統』平凡社、1984年、333頁）。神聖な土器は、あの世の人（神使）の採取した土でつくるものであった。箕も、誕生と葬式に関係のある道具で、境界性のあるものであった。西洋で「箕の上のイエス」といわれるように、日本や東洋諸国でも、新生児を箕に載せて、部屋中を歩きまわる風習がある。箕は穀物を簸るだけでなく、箒で集めたごみを集める機能をもっていた。現今の葬家の入口に、箒や箕が立ててあるのは、穢れを掃き捨てる意味からであるが、古くは、小枝の束である箒は、生命の付与者、箕は穀霊の誕生の道具と

されたので、両方とも、死者の再生と関係があった。『古事記』によると、天若日子が還し矢にあたって死んだとき、喪屋をつくって、川雁を食物を運ぶ係りとし、鶯を箒持ちとし、カワセミを御饌^{みけ}の係りとし、雀を米つき女^めとし、雉を泣き女^めとして、八日八夜、歌舞して死者を弔った（上巻）。川雁はきさり持ちと呼ばれ、死者の食物を持ち運ぶ者と考えられているが、語義不明の語である。原語は「きさり持ち」であるが、きさは箕であったかも知れない。箕の上に天若日子を象徴するもの、あるいは食物を載せたと考えられるからである。殯の葬列において、先頭に箕を奉じた者が進み、箒を持った者がこれにつづいたのではなかろうか。

1882年、E. S. モースは、紀州と大和の旅行をした。海岸に沿った数か所で、農家へ通じる小径の入口に、細い杖の上に、さかさまにした大きなきのこを載せた、奇妙なものがあるのを見つけた。きのこの柄は紙につつまれ、また下方の杖にも紙がまきつけある。これは、家族に死人があるのを示すのだと彼は聞いた。他所ではこんなものを見たこともなかったので、何を意味するのか判らなかつた（『日本その日その日』3、平凡社、1971年、116頁、図683）。きのこは、マツタケの類であろう。本来は笠を意味したと思われる。死と生の境界の表象として、さかさに立てたのであろう。死体が家を出て葬地に向かうとき、杖と共に出発したのではないかと考えられる。きのこは、死者の被る笠で、杖は死霊の依り代であった。トーテムの世界に入る死霊は、守護神として葬列の先頭に立った。古代エジプトのノモスのスタンダードが行列の先頭に立ち、族章の旗が一族の行列の先頭に立つのと同じである。マツタケは別として、きのこは一般に、ある種の危険を伴うので、魔除け、邪視除けの役目も果たしたであろう。笠が十分に開かないきのこの茎の中には、男根に似るものがあるので、死者の再生の呪術的役割を果たすことにもなったであろう。いずれにしても、さかさまのきのこのしるしは蓑笠の変形で、死者の表象であった。

入口につけるしるしは、強大な力をもっていた。朝鮮の李王朝開創時には、王子や王女、庶出の王女たちが避難する場合、王の親戚や身内の邸宅に行くという定まりがあった。しかし、壬辰の乱が起きると、王子、王女たちは侍衛たちに命じて、吉の方位や行き先を定めて、士族の家に殺到した。門に標^{しるし}を貼りつけると、士族はその日のうちに、家の明け渡しをしなければならなかつた。家産や什器を片付ける間もなく、家を明け渡すと、王子たちは、その家に数日もしくは半月か一か月も留まってから、再び吉の方位に移ってゆく。そこでまた標を門に貼りつけて、その家の主人を逐い出してしまう（林鐘國著・林海錫、姜徳相訳『ソウル城下に漢江は流れる』平凡社、1987年、105頁）。神格視された朝鮮王室の王子、王女によって貼られた門のしるしは、絶対のものであったので、臣下は抗することができなかった。

11世紀の奈良に住した永超僧都は、魚がなければ、どんな食事もしない人であった。朝廷に召されて京都にいた間、久しく魚を食べなかつたので体が弱ってしまった。奈良に帰る途中、弁当を食べたが、弟子の一人が、近辺の民家に魚を乞い、師にすすめた。魚を出した人は、のちに夢を見た。おそろしそうな鬼神が、その辺りの民家にしるしをつけてゆくのだが、自分の家は除外したので、人をやって尋ねたところ、永超僧都に魚を奉ったので、しるしをつけなかつたと、使

いの者が伝えた。その年、この村の民家は全て疫病にかかり、死ぬ者が多かったが、魚を奉った家一軒だけは、わざわざからまぬかれた。そこで、僧都のもとへ参上して、このことを申し上げた。僧都はこれを聞いて、褒美の衣料を一重ね与えて、家に帰らさせた（『宇治拾遺物語』巻4ノ15）。この場合は、門のしるしは、疫病が訪れるしるしとなり、疫病を退散させる力をもたない。この場合、しるしは守護神ではなく、わざわざそのものである。見方を変えれば、しるしは悪神であるといえよう。

ヤハウェはモーセにいった。私はエジプトの地の、パロ（ファラオ）の初子から、引き臼を引く奴隷女の初子まで、全てを打つであろう。イスラエルの民は、門に羊の血でしるしをつけ、家の中に留まれば、それを避けることができる。そこでモーセは、人々に、ヒソップ（香草の一種）の束を鉢に入れた小羊の血に浸し、入口の鴨居と左右のかまちに塗らせた。ヤハウェは、入口に塗られた血のしるしを見て、初子を打たないで過ぎ去った。これが過越節の起源である（「出エジプト記」11.1-10、12.1-28）。イスラエル人の伝承では、恐るべき主ヤハウェは、門に塗った血のしるしを見て、その家を避けた。永超僧都の伝承では、鬼神が各家にしるしをつけ、人間は自分の家にしるしをつけない。両方の伝承とも、災害をもたらすのは神である。永超僧都の伝承では、血でしるしをつけるとはいっていない。これは、日本に犠牲の血を処理する伝統がなくなってしまったからである。日本の説話にも、ユダヤ教の過越節と同じモチーフが見られることは、大へん興味のあることである。ユダヤ教徒の家の入口（ときに裏口にも）の、外から入るときの右側に、メズーザーというものが取り付けられている。メズーザーは、古くは小さい木の箱であったが、近代は、長さ6〜7センチ、幅2センチほどのガラスやプラスチックの容器である。中には羊皮紙が入れてあり、一面には「申命記」の二箇所の聖句を記し、他の面にはシャッダイ（神の意）と書かれている。容器に入れるときは、シャッダイの文字が外側になるようにして入れる。「申命記」の聖句というのは、汝はこれを汝の手につけてしるしとし、汝の目の間に置いて覚えとし、また、汝の家の入口の柱と、汝の門とに書きしるさなければならない（6.8-9）と、もしわれわれが、命じられたとおりに、この全ての命令を、われわれの神の前に守って行かなければ、それはわれわれの義となるであろう（6.25）の二句である。家の中からいえば、入口の左のかまちの上部に、神という字を書いた紙をメズーザーのケースに入れる。小正月にあたる過越節のときは、供儀した小羊の血を入口の両かまちと鴨居に、ヒソップの束で振りかける。神を代表する入口の柱に血を塗ることにより、新しい年も、神を活性化しようという意味である。

カエサルは、敵軍が戦闘の準備に入った様子を知って、自分のテントの前に、紅色の上着を張るように命じた。ローマでは、これは戦闘の合図であった（『プルターク英雄伝』（8）「カエサル」68、岩波書店、1955年）。ローマでは、凱旋將軍は紅色の上着を着ていたが、同じ上着は、出陣のしるしに用いられたことになる。凱旋將軍の紅衣は、神に供儀した敵の血で赤くなった上着を象徴し、出陣の紅衣は、勝利を祈願して供儀したいけにえの血で赤くなった上着を象徴した。欧米ではかつて、天然痘が流行したとき、患者を出した家は、入口に赤い布を掛けて目印とした。

赤い目印は、疎外と差別の対象とされたが、他方、それに劣らない効力をもっていたようである。つまり、赤い布が魔除けの力をもっていて、これ以上、患者の病状が悪化しないまじいとなったことである。赤は病氣平癒のための供儀の血の色であった。江戸時代末期から明治時代初年にかけては、ほとんどの人が天然痘にかかった。外国人なら、ひどく恐れて、近寄らないような、天然痘で覆われた子供が、母親の背中におぶさって戸外を歩いた。しかし、その病氣にかかっている家では、入口にしめ縄を張り、四手を垂らして目印としまければならなかった。しかも、子供自身は、まっ赤な布を頭にまきつけて、病氣にかかっているという目印にしていた。しかし、家を消毒もせず、病人の衣服を焼却するわけでもなく、万事運まかせだった（J. R. ブラック著・ねず・まさし、小池晴子訳『ヤング・ジャパン』1、平凡社、1970年、261頁）。この風習の起源が何であるのか知らないが、日本では、入口に赤い布をぶら下げて目印としたのではなく、患者の頭にまいて目印とした。そこで、床についている病人は、赤い鉢巻をして呻吟していた。赤い鉢巻は、魔除けであり、これ以上、病氣が悪化せず、治癒することを願うまじいであった。入口で供儀して、その血を柱にかけける風習は、日本では赤豆粥をかけたり、おこわを供えたりする風習にとって代わられたので、赤い布の鉢巻は、供儀とは考えられなかった。

古代中国では、1月7日の人日の日、鬼車鳥が飛ぶという伝承があった。この日の夜、鬼車鳥が飛来してくるというので、家々では、床や戸を打って音を立て、犬の耳を振り、灯火を消して鳥を払った。『玄中記』によると、この鳥の名は姑獲、あるいは天帝女、あるいは隠飛鳥、あるいは夜行遊女と呼ぶ。好んで、人の女子を取って、授乳して養う。この鳥は、小児のある家で（夜に衣服を干したままにしておく）布を見つけて、血をつけてしるしとし、子供を掠ってゆく。そこで、世間では鬼車鳥という（宗懐著・守屋美都雄訳注、布目潮風他補訂『荆楚歲時記』平凡社、1978年、49頁）。古代イスラエルの過越節では、戸口に血でしるしをつけた家の初子は殺されなかった。この血は、初子の代わりに殺された小羊の血であるので、戸口に血のしるしのある家は、初子を殺したことになる。血のしるしのある家は、初子の供儀が完了したことを表示していた。中国の場合は、鬼車鳥自らが、血をつけてしるしとし、その家の子供を掠る。鬼（車）鳥というのは、天上から馬車に乗って地上に降りてくる祖霊あるいは死者の霊魂であったと考えられる。決して悪魔のような悪しき存在ではなかった。天帝女とか、天空を夜間に飛びまわる意味の夜間遊女という別名もある。中国では1月7日の人日に、鳥の姿をした祖霊が来訪し、人々は戸を打って音を立て、灯火を消して祖霊を祭り、犬の耳を振った。ゾロアスター教では、成人式などのような通過儀礼が完了したとき、犬の耳を振る習慣がある。耳を振ることについては、別に論ずる。

イランやアフガニスタンその他のイスラム諸国の村々では、結婚式の翌朝、婿がわの親は、屋根（乾燥地域なので、コンクリート・ビルの屋上と同じような平たい陸屋根になっている）の上から、お祝いのために門前に集まった村人たちに、新婦の出血のついた敷布を見せる。出血がない場合、鶏の首を切ってその血を利用したりする。事態が悪化した場合、嫁は親元に帰され、家

の入口あるいはロータリーなどに引き出され、みなに投石されて殺された。この習慣は、『旧約聖書』の時代にもあった。もし人が妻をめとり、その女をきらったため、この女は処女でなかったと、虚偽の非難をあげたとき、女の父と母は、彼女の処女の証拠をとって、門の所にいる町の長老たちに差し出し、彼女の父は長老たちに布を広げて見せなければならない。長老たちは男を捕らえて打ちこらし、罰金を課して、女の父に与えなければならない。男は女を妻とし、一生、離縁してはならない。その女に処女のしるしが見られないときは、彼女を父の家の入口に引き出し、町の人々は彼女を打ち殺さなければならない（「申命記」22.13-21）。入口に石の山ができ、不幸な女の死体が山の下に横たわり、腐敗して悪臭を発するままにされた。人々は、狭くなった入口の左右の隙間を通して出入りした。入口に血のしるしがある場合は、事なきをえたが、血のしるしがない場合は、嫁は殺されなければならなかった。鶏などの供犠によって、その血をつければ、死を免れることができた。結婚における女子の出血は、神への、女子の供犠に等しいものと考えられた。

中国では古来、女子には生まれると共に、元紅という血の塊があると信じられた。結婚の夜、元紅が出るか否かによって、処女であるか否かを判断した。これは、その夜、白布が赤く染まるか否かによって分かった。この白布を喜帕つまりめでたい布と呼んでいる。婚礼の夜、花嫁の母が花婿にこの布を与えるのが古式であるが、娘が嫁入り道具の中にいれてゆく。結婚の周旋人は、白布に赤いものを見ると、吉報を娘の実家に知らせにゆく。実家に近づくと、近所にも聞こえよがしに、大声でわめき立てて知らせる。婿の家では、古くは、赤く染まった喜帕を軒端にかけて自慢したといわれているが、今では見られなくなった（永尾龍造『支那の民俗』磯部甲陽堂、1927年、60-62頁）。処女でなかった場合でも、慶事であるので、いろいろ工夫して白布を染めることは、西アジアと同じである。物見高い近所の人々が婿の家の前に集まって、結果如何とひしめき合うのも、西アジアと同じである。

イランをはじめとする西アジア地方の遊牧民の女性は、銀色の硬貨を連ねて首飾りをつくり、首にかけている。この首飾りは、年配の女性から、あどけない少女にまでおよんで用いられる。銀貨が光ることによって、邪視をはね返すと信じられている。これとは別に、6～7歳ぐらいの女子は、この首飾りの他に、母親が使った経血用の布切れを首に垂らしている。これも、血の力によって、邪視を防ぐことができると考えられている。しかし、考え方によっては、幼児死亡率の高いこの地方では、邪視によって幼児の生命が危機にさらされるのを防止するほか、血のしるしをつけることによって、命をとり上げる鬼神から身を守ろうとしているとも考えられる。沖縄では、女が若い男にテサジといって手拭いを贈るが、いちばん心をこめたのは、経血で染めたものである（桜井徳太郎・谷川健一・坪井洋文・宮田登・波平恵美子『共同討議 ハレ・ケ・ケガレ』青土社、1984年、108-109頁〈谷川〉）。経血布は妹の力のこもったお守りとされたのであろう。『古事記』にいう。ヤマトタケルは、東国平定の帰途、尾張国に立ち寄り、婚約していたミヤズヒメの家に入った。姫は食膳をさし上げ、杯を献った。このとき、姫の襲おすいの裾に月の障り

のものがついていた。経血を見て、ヤマトタケルがうたった歌に姫が歌で応えたあと、二人は結婚する。ヤマトタケルは草那芸剣を姫の床の辺に置いて、伊吹山の神を討ちに出かけた（景行天皇）。ヤマトタケルは、経血のついた布を身につけて伊吹山に向かったのではないかと考えられる。布は妻の力の源泉で、護符であった。それに代えて、ヤマトタケルは、自分の分身ともいえる草那芸剣を、姫の床の辺にとどめた。姫にとっては、剣が護符であった。経血は女のしるしであり、剣は男のしるしであった。しるしを交換することは、結婚することであった。

ことばによるものごとの規定は、細部にわたって記述できるが、しるしによるものごとの規定は、その喚起する範囲が個人によって異なる。喚起するものが画一的でないことが、文化に流動性を与え、文化の発展に寄与している。ことばの意味するものと、しるしの意味するものとの間には、硬軟のちがいがあり、伝達には両方の作用が必要と考えられる。

(1993. 9. 12 受理)